

# ワンダフル・ワールド

関根信一

## 【登場人物】

宮坂修一 宮坂家の長男。三三歳。  
宮坂亮二 宮坂家の次男。三二歳。  
宮坂唯史 宮坂家の三男。二六歳。  
宮坂奈津子 亮二の妻。二九歳。  
宮坂万里子 三兄弟の母。五六歳。  
宮坂喜久江 三兄弟の祖母。八六歳。  
内藤栄一郎 宮坂酒造の従業員。三四歳。  
渡部尚人 修一のパートナー。三三歳。  
斉木 守 修一の友人。四五歳。  
錦織和寛 修一の友人。二七歳。  
水野幸枝 修一の友人。五五歳。  
水野浩行 幸枝の息子。二四歳。  
神田健吾 修一の友人。二一歳。

## 【時】

基本となる時間は2011年4月から2012年4月にかけての約一年。

## 【ところ】

主な舞台は日本海に面した東北の港町

## 【舞台】

白いパネルの間から青い海が見える。  
椅子が八脚ほど無造作に置かれている。大きなテーブルが一つ。  
これらが組み合わされることでいくつかの場面が表現される。

開幕時、テーブルは舞台中央で、横倒しになっている。難破した大きな舟のようにも見える。  
椅子もあちこちで倒れたり、ひっくり返っていたり。  
これもまた、忘れられて、半分砂に埋まっているような印象を与えることが望ましい。

\* \* \* \* \*

一、緊急地震速報

開演前から波の音が聞こえている。

おだやかな海。

その波音の中、ゆっくりと暗転。

舞台が明るくなると、そこは、日本海に面した東北の浜辺。

2011年4月中旬の週末。時刻は夕刻。

宮坂修一と渡部尚人が正面にある海をながめている。

修一は、ビデオカメラを手にしている。海を撮影しているらしい。

尚人は、犬の散歩。犬の名前は「宇宙」という。

尚人  
宇宙！

犬の吠える声。

尚人、足元から何かを拾って遠くに投げる。

修一の携帯から緊急地震速報のアラームが流れる。

二人の動きが止まる。

尚人  
何、地震？

修一、カメラを止めて、携帯を取り出して確認する。

修一  
(読む) 福島県沖五十キロ。最大震度4つて。

尚人  
来た？

修一  
わかんない。

間

尚人 来た？  
修一 わかんない。  
尚人 どっちよ？  
修一 なんで人に聞くかな？  
尚人 あれからずっと揺れてるみたいな気がするの。

間

尚人 来ない？ 来ないね。  
修一 来るならもう来てる頃かも。  
尚人 うん。  
修一 でも、間に奥羽山脈あるし。時間かかるのかも。  
尚人 どっちよ？  
修一 うーん。  
尚人 来ない、もう来ない。宇宙も走り回ってるし。  
修一 宇宙、行くぞ。

犬の吠え声。

修一 もう、帰ろう。大丈夫だと思うけど、海辺にいるのってなんかあれだし。  
尚人 うん。

二人、歩きながら会話。尚人は宇宙を連れている。

修一 あんまりしょっちゅうだからセンサーがおかしくなったっていうよね。  
尚人 緊急地震速報？  
修一 うん。  
尚人 なんで？ 人じゃなくて機械なんだからさあ、おかしくなるっておかしくない？  
修一 そこが機械の限界なんじゃない？  
尚人 なんだか、もて遊ばれてる気がするんだよね。こないだもさあ、どうせまたと思  
つてたら、でっかいの来たし。  
修一 月曜日？  
尚人 そう。ちょうど一ヶ月だったし、また大きいのが来るんじゃないかってネットでも  
噂になってたけど。油断するじゃない。こう、しょっちゅうじゃ。  
修一 たしかに。  
尚人 そしたら、震度4。もっと大きいかんじしたよね。福島じゃ震度6だったんでし  
よ。  
修一 だから、油断したらいけないんだって。

尚人　でもさあ……。よし、宇宙、ハウス！

\* \* \* \* \*

## 二、餃子

場面は変わって、修一の家。

倉庫を改造した広いアトリエのような空間。

修一と尚人がやってくる。

尚人　ただいま。

修一　……。

尚人　ねえ、外より、うちの方が寒いつてどういうことよ？

修一　まだ4月だから。

尚人　そういうことじゃなくて。

修一　すぐストーブ焚くから。あ、薪がなかったんだ。割ってもらっていい？

尚人　割るの？　持つてくるとかじゃなくて。

修一　うん、ちょうど無くなったんだよ。尚人来るし、一緒に薪割りもいいかなって。

意味わかんない。なんで久しぶりに会った週末に二人で薪割りするの？

修一　一人よりラクだよ。

尚人　もうエアコン点けようよ。あるんだからさ。

修一　だめだめ。電気はなるだけ使わない。

尚人　計画停電はもう終わったんだよ。

修一　それは関係ない。

尚人　よく、こんな不便な暮らしできるねえ。いくら田舎だからってさあ。テレビもなし。

修一　見ないから。

尚人　信じられない。

修一　うち帰って見ればいいじゃない。

尚人　見ますよ、見ますけど。こういうのおしゃれとか思っちゃう感性なわけ？

修一　そうじゃないけど、好きなんだよね。

尚人　そりゃ好きじゃなきゃやってられないだろうけど。美大出ってかんじだよな。

修一　何、その言い方？

尚人　じゃ、しょうがない薪割るか。鉦どこよ？

水野幸枝の声。このアトリエの大家。

幸枝 おばんです。いますか？  
修一 あ、はい。

幸枝、顔を出す。

幸枝 (登場して) はい、おじやまします。あら、渡部さん、おばんです。  
尚人 どうも。

幸枝 やだ、また邪魔してしまったかしらね。

修一 いえいえ。

尚人 いえいえ。

幸枝 駅の待合室のオブジェ、見たわよ。かわいいわね。あれ、こないだ自然学校の手  
作り教室で作ったやつ？

修一 いえ、あれとは別なんですけど。少し大きくして秋田杉を使って。あと浜で拾っ  
た貝殻と。

幸枝 いいわねえ、ああいうのがあると。殺風景な待合室がほのぼのして。いつも楽し  
みなのよ。季節毎じゃなくて、毎月変えてもらいたいくらい。

修一 ありがとうございます。

幸枝 ああ、それでね、宮坂さん、ちょっとお願いがあるんだけども。

修一 なんですか？

幸枝 おかず作りすぎてしまつて。大したもんじゃありません。

修一 ありがとうございます。いつもすみません。

幸枝 あ、そう。じゃ、ちょっと取ってくるんで、待っててね。

幸枝、退場する。

尚人 あの人の、俺いると必ず顔出すよね。(あたりを見回し) カメラかなんかついてる  
んじゃないの？

修一 いつもだから、来てないときだつて。

尚人 それって、おかしくない？

修一 いいじゃない、大家さんなんだから。俺達のこと知ってる数少ないご近所さんな  
んだから。

尚人 あのさ、自分のこと勝手にカミングアウトするのはいいけど、なんで俺のことま  
で話してるわけ？

修一 尚人のこと話したわけじゃない、付き合ってる人いるのかつて言うからさ。

尚人 それ同じことだよね。

修一 いいじゃない、職場じゃオープンにしてるんでしょ？ 何か問題？

尚人 そうじゃないけど。

幸枝、入ってくる。大きな荷物。

幸枝 おじゃまします。これなんだけど。

幸枝、包みをテーブルの上に置く。

修一 こんなに？ 何ですか？

幸枝 これがきやらぶき、ぜんまいとあぶらげの煮物、タラの芽のごま和え。

尚人 山菜づくし？

幸枝 そろそろおしまいだから。それから、これが餃子。作りすぎてしまつて。浩行、今日、バイト休みだつていうから、手伝わせてたら。なんだか夢中になつてしまつてね。気がついたら山になつてて。

尚人 ありがとうございます。

幸枝 ひだひだつているのが焼き餃子、ぺったんこなのが水餃子ね。

尚人 二種類あるんだ。

幸枝 焼き餃子の方、にんにくたくさん入つてるから。青森の親戚からたくさん送つてくるのよ。そろそろ新しいのが届く頃だから、使い切つてしまおうつて。

尚人 ありがとうございます。じゃ、今日の夕飯はこれで決まり。いつもすみません。そんなこつちこそ。

幸枝 助かります。(修一に) ね？

修一、浮かない表情。

尚人 どうしたの？

修一 いや、ありがとうございます。

幸枝 あんまりありがたくなさそなかんじだけど。

尚人 あれ、だめなの、餃子？

幸枝 渡部さんいるのにムード台無しつてかんじ？

尚人 もうそんな時期は過ぎたんで。にんにくでも焼肉でも全然平気です。

幸枝 牛乳に漬けてチンしてあるから、臭くないのよ。

(修一を気にして) どうかした？

間

修一 餃子にはちよつと思ひ出があつて。

幸枝 思ひ出つて？

修一 いや、何でもないです。いただきます。

餃子を手取るが止まってしまう。

幸枝 いいのよ、無理しなくて。

修一 実は……

尚人 つらいならやめようか？

幸枝 じゃあ、私、持って帰るわね。

修一 昔、実家で餃子パーティーよくやってたんです。

幸枝 ご実家、酒蔵でしょ？

尚人 明治以来の由緒ある。いいの、餃子パーティーなんて？

修一 酒蔵だって、餃子くらい食べるよ。母親が、そういうの好きで、何かっていうと

家族や親戚が集まってパーティーだって。子供の頃から。餃子とか手巻き寿司とか流しソーメンとか。

尚人 へえ。

修一 十年前、大学最後の夏休み、一年ぶりに帰省してた時のことです。

修一、映画の撮影を開始するように立ち上がる。

修一 用意、スタート！

柱時計の音が鳴り始める。時刻は夕方六時。

宮坂酒造の面々がやってくる。

母親の万里子、次男の亮二、三男の唯史、祖母の喜久江、亮二の恋人（当時）の奈津子。それぞれ、尚人と幸枝に挨拶していく。

万里子 おばんです。

修一 母です。

亮二 こんばんは。

修一 弟の亮二です。

奈津子 おじゃまします。

修一 亮二の恋人のなっちゃん。

唯史 どうも。

修一 下の弟の唯史。

喜久江 おばんです。

修一 それから、おばあちゃん。僕の家族です。

以後、しばらくの間、尚人、幸枝は、テーブルを離れ、少し離れたところから家族を見守る。

修一は、二つの空間の間を行ったり来たり。

時計が鳴り終わり、一同がテーブルに落ち着いたところで場面が始まる。

喜久江（柱時計を見上げて）はあ、治った！

奈津子 いいですね、柱時計。アンティークですか？

万里子 ばあちゃんの嫁入り道具。すぐ止まるのよ。ただの飾り。ばあちゃんが気が向いたとき治してんの。（喜久江に）誰からもらったんだっけ？

喜久江（よく聞こえないようす）え？

万里子（少し大きな声で）その時計。

喜久江 おじいさんの時計だよ。

万里子 おじいさん？ じいちゃんからもらったの？

喜久江 え？ 誰だったっけ、あれ、何て言ったっけ？ 顔は浮かぶんだけど。

奈津子 いいですよ、あの、無理しなくて。

喜久江 平井堅！

一同 は？

喜久江 歌ってるでしょ、時計の歌。

奈津子 ああ、歌ってますね。たしかに。

喜久江 男前だよね。

亮二 ばあちゃん、タイプ？ ああいう濃い顔？

喜久江 タイプ。ああ、すつきりした。

万里子（奈津子に）ちよつとぼけてんのよ。

奈津子 はい・じゃあ、お手伝いします。

万里子 そう、それじゃ、お願いね。

奈津子 はい。ちよつと手洗つてきます。

万里子（亮二と唯史に）あんたたちも。あんたたちタネつくつて。修一、あんたも。

修一 うん。

みんな手を洗つて、テーブルに戻って来る。

奈津子 すごいですね。皮から作るんですか？

万里子 そう、全然違うのよ。もちもちとしたかんじがね。水餃子は特に。

亮二 自慢なんだよね。

万里子 まあ、食べてつて。

唯史 これいくつぐらいつくるの？

万里子 今日は、大勢集まるから、五百個くらいかな。

唯史 そんなに？

万里子 だからみんなでやるんでしょうが。修一、久しぶりに帰って来たんだもの、会社の人たちもみんな顔出すつて。（修一に）榮ちゃん、奥さんが熱出して寝てるから今日はやめにしなさいつて言っただけけど、あんたの顔だけ見に来るつて。



修一 榮ちゃん、結婚したんだ？

万里子 うん、もうじきお父さんだつて。

修一 へえ。

万里子 あんたもしつかりしなさいよ、同い年なんだから。

一同、餃子をつくっている。

万里子がしきつて、餃子がどんどんできあがっていく。

しばし、黙々と作業する一同。

亮二 (万里子に) あの子、あとで父さん来たら、言おうと思ってるんだけど、結婚しようと思うんだ。

一同の手が止まる。

喜久江 誰と？

亮二 そんな決まってるだろ。

奈津子 (手を挙げて) はい。

万里子 いいのかい？

奈津子 はい。よろしくお願いします。

万里子 (涙ぐんでいる) いえいえ、こちらこそ。

万里子、奈津子の手を握る。

奈津子 餃子……。

万里子、涙ぐんでいる。

修一 はい。ティッシュ。

修一、ティッシュをとって渡してやる。

唯史 すごいね、鉄道同好会仲間で結婚。テツオとテツコ。

奈津子 奈津子ですけど。

喜久江 プロポーズはなんて？

亮二 ばあちゃん。

奈津子 新婚旅行でJRの全路線制覇しようつて。

唯史 よくわからない。

亮二 行こうね！

奈津子 うん。

修一 大学はどうすんの？

亮二 ま、結婚で言っても、卒業してからの話なんだけど。

唯史 じゃあ、なんで今？ あ、もしかして、できちゃったとか？

万里子 赤ちゃん？

亮二 違うって！ ただ、決めたから、早めに報告したいなと思って。

奈津子 ふつつかものですが、よろしくお願いします。

万里子 ご両親には改めてご挨拶に伺いますから。結納もちゃんとしないとね。

亮二 いいよ、そんな。

万里子 こういうことは最初が肝心なんだから。ばあちゃん、よかつたねえ、ひ孫の顔が見れるよ。

亮二 だから、まだだつて。

喜久江 修一は？

修一 え？

喜久江 修一はまだなのかい？

問

修一 俺はいいから。そんな、まだ学生だよ。跡取り、決まって良かったじゃない。

万里子 あんた忘れたわけじゃないだろうね。跡注ぐ代わりに、東京の大学行かせてもらってること。

修一 わかつてるよ。

万里子 高校卒業したらすぐうちの手伝いしてくれたつていいのに、もつと勉強してからの方が将来のためにいいつて。

修一 わかつてる。

唯史 来年卒業したら、すぐ帰ってくるんでしょ？

万里子 当然でしょ。みんな待ってるんだから。帰つて来たら、榮ちゃんと一緒に父さんに弟子入りして、杜氏の修行始めるのよ。

亮二 おれも手伝うから。

万里子 じゃ、できたのここにまとめてくれる。焼き餃子はこっち。水餃子はこっちね。

奈津子 はーい。

一同、できた餃子をまとめる。

修一 あの、それなんだけど。亮二、継いでくれないかな？

一同 へ？

万里子 何言つてんの？

修一 だつて、結婚も決まったし。長男が継がなきゃいけないつてこともないと思うん

だよね。

亮二　　なんで……

万里子　　何言ってるの？　あんた父さんとの約束。

修一　　今まで言えなかったんだけど。亮二がそういうことなら。

亮二　　なんだよ。

修一　　いいだろ、その方が、俺と一緒にとか言うより。

亮二　　押しつけるのかよ？

修一　　だって、手伝うって。手伝うよりは、自分で好きなようにやった方がいいんじゃないかって。

万里子　　うち継がないで何するの？

修一　　え、映画撮りたいなって。

万里子　　映画？

修一　　大学で映画研究会に入ってるんだけど。

万里子　　何ばかなこと言ってるの？

修一　　ちよつとコネもできたんで、本気でやってみたくて。

万里子　　ばかばかしい。

修一　　でも、決めたから。だから、亮二、なっちゃん、うちのことはよろしくお願いします。

問

万里子　　修一、あんたは宮坂酒造の跡取り息子なんだから、ちゃんと結婚して子供産んで、跡継ぐのが役目なの。

修一　　でも……

万里子　　父さんには、こんな話したらだめだよ。はい、おしまい。

修一　　俺、結婚しないから。

万里子　　そんなわがまま言って。

修一　　わがままじゃない。俺は結婚できない。

喜久江　　なして？

修一　　おれは、ゲイだから。

一同　　同啞然。唯史は激しく動揺する。

喜久江　　ゲイ？

修一　　男が好きなの、結婚しないの。

喜久江　　へえ。

万里子　　なんで今そんな話すの？　みんながいるところで。

奈津子　　すみません。

修一 ……。

万里子 だめ、そんなのダメ。絶対に。

修一 だめって言われても。

唯史 ずるいよ、兄ちゃん。自分だけ。

修一 なんだよ。

唯史 兄ちゃん、大学、違うところ行ってるんだよ。

万里子 え？

唯史 農大じゃなくて、美大だよ。

修一 おい……

唯史 なんだよ、なんだよ自分ばかり勝手なことして。

唯史、席を立てて出て行く。

万里子 唯史！（修一に）ほんとなの？

修一 ……うん。

亮二 兄貴。

万里子 ずっと嘘ついてたんだ。だましてたんだね。私たちのこと。

修一 ごめん、でも。

万里子 わかった。それは許す。でも、跡は継ぎなさい。これは命令。母さんの。

修一 いいよ、じゃあ、父さんに話すから。

万里子 何言ってるの？

内藤栄一郎が入ってくる。

栄一郎 ああ、修一さん、ごぶさたです。

修一 ああ、栄ちゃん。結婚おめでとう。

栄一郎 ありがとうございます。お元気ですか？

修一 うん、なんとか。

栄一郎 わあ、今日は餃子ですか。残念だなあ。奥さんの餃子、絶品だから。

亮二 今日はなし。餃子パーティーは中止。

栄一郎 え、なんでです？

亮二 なんででも。

栄一郎 だって、社長もうすぐ。あ、社長、お先にすみません。

万里子 父さん……

父親がやってきたらしい。

修一 父さん、話があるんだけど。

万里子 修一！

一同、修一を見る。

修一 カット！

尚人 何、カットって？

修一 ここまでってこと。

尚人 これからおもしろいのに。

宮坂家の面々はこのやりとりの間に一礼をして退場する。

幸枝 それでどうなったの？

修一 勘当されました。

幸枝 勘当？ 今時？

尚人 さすが由緒ある家柄だよな。

修一 仕送りもストップ。二度と家の敷居をまたぐなって。その日のうちに荷物まとめて。それきり、実家には帰ってません。

尚人 十年ずつと。

修一 十年ずつと。

幸枝 それで、映画のお仕事？

修一 いろいろやってみたんですけど、なかなか。お世話になった監督がこの町の出身で。病気で入院してるのを見舞いに来てるうちに、ここに住んでみるのもいいかなって。

幸枝 いえいえ。でも、連絡ぐらいいはとってるんでしょ？ 弟さんとか？

修一・尚人 それが……弟とはまたちよつとあつて……

尚人 いいから言っちゃいな！

幸枝 ぜひ！

修一、自分の部屋で荷物をまとめている。

唯史、登場する。

唯史 もう行くの？

修一 今なら最終間に合うから。

唯史 ごめん、大学のこと。

修一 いいよ。

唯史 もつとちゃんと話せばよかつたんじゃない。

修一 無理無理、いくら話したって。俺も決めたから。

唯史 ほんとに意地っ張りなんだから。よくないよ。

修一 わかっている。  
唯史 わかっているよ。そういうの周りが迷惑するんだからね。  
修一 なに？  
唯史 (強く) なんでああいうこと言うかな？  
修一 へ？  
唯史 カミングアウト。  
修一 だって、しょうがないじゃん。  
唯史 しょうがないよ。ただ、跡継ぎたくないって、それだけでいいじゃない。  
修一 でも、いつかは言わなきゃいけないと思って、見合いの話とか母さんいろいろ持つてきてるみたいだし。  
唯史 断れば良いじゃない。  
修一 いつまでも？  
唯史 いつまでも。そういう人いっぱいいるんじゃないの？  
修一 俺はそうじゃなくしたかったから。今言わなきゃ一生言えないと思ったんだよ。  
唯史 勝手だよ。  
修一 だから、唯史も好きにすればいいよ。  
唯史 へ？ どういうこと？ 知ってるの？  
修一 知ってるって何を？  
唯史 僕もゲイだってこと。  
修一 (大声で) ええ？ 言つてよ！  
唯史 なんて、そっちだって黙ってたじゃない。  
修一 全然知らなかった。(嬉しそうに) そうか、そうなんだ。  
唯史 もしかして、喜んでたりする？ それ違うからね。許さないから。  
修一 へ？  
唯史 修ちゃんが先にカミングアウトしたから、僕もう何も言えなくなったじゃないか。  
修一 なんて？  
唯史 だめでしょ、兄弟三人のうち、二人もゲイって。  
修一 だめって言ったって、そうなんだからしょうがないよ。  
唯史 僕も考えてたんだよ、いつ話そうかなって。最初は兄ちゃんたちかなって、それから母さんかなって。台無しだよ。  
修一 ついでだから言っちゃえば、チャンスかもよ。  
唯史 ……いいよ。そっちは。  
修一 付き合ってる相手いるの？  
唯史 いるよ。修ちゃんは？  
修一 いない。  
唯史 じゃあ、今言うこと全然なかったじゃない。  
修一 そういうことなの？  
唯史 そうだよ。じゃあね。

唯史、出て行く。

修一 元気で！  
唯史 (戻って来て) うん。

唯史、退場する。

間。

亮二がやってくる。

亮二 兄貴。

修一 ああ。

亮二 俺、思うんだけど、ここで出てつちやダメなんじゃないかな？

修一 知ってるだろ、父さん、一度言ったら、きかないこと。

亮二 でもそこをなんとかさあ。

修一 無理だって。

亮二 なんだかうれしそうだね。

修一 そんなことない。

亮二 いいな、好きなことできて。

修一 亮二だって、好きなことすればいいじゃないか。

亮二 一緒にあやまらない？

修一 あやまることなんかない。

亮二 でも嘘ついてたじゃないか。

修一 それはそうだけど。

亮二 頼むよ！

間

修一 ごめん。

間

亮二 (取り出して) 母さんが、餃子持って行って。

修一 いらない。

亮二 焼いてあるから電車の中で食べろって。

修一 無理でしょ。

亮二 東京行きの最終、がらがらだよ。気にすることない。

修一 ……いらない。

亮二 そう。じゃあ。

亮二、退場する。

幸枝 でも、この震災のあとは連絡とってみたんでしょ？

修一 ええ、それは……。

尚人 翌日、行ったんだよね。

修一 うん。

幸枝 ご家族は？

修一 みんな無事でした。

幸枝 そう、よかったわね。

修一 でも、僕の記憶の中にある町は全部なくなっていました。ほんとに何もかも。うちは海からは少し離れてるんですけど、それでも、まるで知らない街みたいでした。いや、違う国に来たみたいで。いや、映画のセットみたいにどこか嘘っぽくて。うちのあったところには、土台だけが残っていました。酒蔵も倉庫も事務所も店も何もかもがなくなっていて、潮の匂いと傷んだ魚の臭いだけがあたりに漂っていました。中学校が避難所になってるって聞いたんで行ってみたんですけど、誰もいない。どうやら、避難所じゃなくて、知り合いを頼っていったようなんですけど、わからなくて。それで、家のあったところに僕の連絡先を書いて貼って、戻ってきたんです。

幸枝 そしたら？

修一 電話がかかってきました。母からです。

修一の携帯が鳴る。

万里子が登場する。

修一 (電話に出て) もしもし。

万里子 修一？

修一 あ、母さん！ どうしてる、みんなどうしてる？

万里子 みんな無事だから。みんな生きてるから。みんななくなっちゃったけど。酒蔵も倉庫も事務所もなにもかも。どこにいるの。

修一 どこにいるの。

万里子 栄ちゃんの実家にお世話になってるの。

修一 そっち行くよ、

万里子 来てどうすんの？ ただでさえ、大勢で迷惑かけてんのに。

修一 だって、何か手伝うこと。

万里子 手伝うことなんか何もないわよ、みんななくなっちゃったんだから！

修一 ……。



万里子 父さんがね、修一には頼るなって。帰ってこいって言うなって。こんなところ見せたくないって。あたしもそう思ってる。

修一 ……

万里子 そっちはどう？

修一 こっちは、たまに揺れるけど、大丈夫。

万里子 そう、じゃあ、あんたも気をつけてね。まだ何かあるかわからないから。

修一 そっちこそ。

万里子 じゃあね、避難所の公衆電話からだから。もう切るね。

万里子、電話を切って、退場。

幸枝 宮坂さん、その代わりに被災地支援されてるの？

修一 代わりってわけじゃないです。自然学校のメンバーがボランティアで行くついでうから一緒に行ってるだけで。

幸枝 えらいわよねえ。この一ヶ月ずっとだもの。

修一 時間はいくらでもあるんで。

幸枝 明日はどこに？

修一 気仙沼です。手作り教室してきます。さっき、貝殻や流木拾ってきたんで。

幸枝 渡部さんも？

尚人 僕は仕事なんで。

幸枝 私も何かできたらなあって思うのよ。でも、一緒に行くのはねえ、ちよつと大変そうな気がして。もしこっちまで避難したいって人がいたら、言ってね。部屋いっぱい空いてるから。

修一 いいんですか？

幸枝 うん。そうだ、これ（差し入れのおかず）明日持ってって。まだ、食べ物、配給なんでしょ？

修一 ええ、ライフラインの復活もなかなか。

幸枝 本当だったら、あっちでも山菜のおいしい季節なんだねえ。そうだ、まだあるから、持ってくるわ。そうよね、多い方が。

修一 ありがとうございます。

幸枝の息子の浩行がやってくる。

浩行 母さん何してんの？

幸枝 ちよつとおしゃべり。あんたこそ何？

浩行 修ちゃんにお客さん。

修一 僕に？

浩行 どうぞ。

喜久江と栄一郎がやってくる。

修一 ばあちゃん！ 栄ちゃんも。

喜久江 修一、まあ、大きくなって。

栄一郎 お久しぶりです。お元気で。……よかった。(涙ぐむ)

修一 やだな……栄ちゃん泣いてどうすんの？ ご家族は無事で？

栄一郎 はい、おかげさまで。

修一 そう、よかった。で、どうしたの？ 二人して？

栄一郎 大奥様のお供でまいりました。

修一 ？

喜久江 修一、うちさ帰ろう。

修一 うちって。

栄一郎 お迎えにあがりました。

喜久江 修一。

間

修一 母さんと電話で話したんだけど、帰ってくるなって。

喜久江 またそんなこと言って。

栄一郎 奥さん、口じゃそう言っても、帰って来てほしいと思ってるんですよ、ほんとは。

喜久江 この人(浩行)に聞いたたら、気仙沼まで来てるっていうじゃないの。なんで帰ってこないの。顔見せてくれるだけでもどんだけうれしいか。

尚人 そうだよ。俺もそう思う。

喜久江 この人は？

尚人 渡部尚人です。修一さんの……。

浩行 パートナーでしょ？

栄一郎 (気づいて) あ！ あ、どうも。

尚人 どうも。(修一に) この震災で家族なくした人、大勢いるんだよ。離ればなれになっても、こういうときこそ、絆を確かめ合うものじゃないの？

栄一郎 そうです、その通りです。こういう言い方不謹慎かもしれませんが、どんな事情があつたって、そんなのみんななかったことにして、もう一度会う、いい機会じゃないですか？

喜久江 修一。

栄一郎 修一さん。

間

修一 そうなのかもしれない。でも……やっぱり、やめておくよ。

喜久江 そんな薄情者だとは思わなかったよ。父さん、もう昔の父さんじゃないから。すっかり弱くなってしまうて。

修一 知ってる。

問

修一 気仙沼の帰りに寄ってみたんだ。うちがあつたところに、もう一度行ってみようと思つて。夕方。郵便局の角、もう郵便局はないけど、曲がったら、父さんが立つてた。倉庫のあつたあたり、背中向けてたから、気がつかнаかつたと思う。ずっと立つてた。声をかけようかと思つたんだけど、声をかけちゃいけないような気がして、そのまま帰つて来た。

喜久江 なして？

修一 なんて言つていいかわからなくて。久しぶり、元気？ 大変だったね、どれもみんな違う気がして。

尚人 何も言わなくていいんじゃないの？ そういうときは。

修一 そのときは気がつかなかつたんだよ。でも、わかつたんだ、こういう姿見せたくないから、帰つてくるなつて言つてたんだなあつて。だから、ばあちゃん、おれは帰らないことにしたよ。

問

喜久江 わかつた。あんたの気持ちはよくわかつた。

修一 ごめんね。これから夕飯なんだ。一緒に食べよう。栄ちゃん、あまり遅くならないうちに帰らないと、道あぶなくなるから。

喜久江 栄ちゃん。

栄一郎 はい。

修一 どこに行くの？

栄一郎 荷物を持ってきます。

修一 え？

喜久江 ばあちゃん、ここで世話になつたら。ずっと。

修一 ずっと？

喜久江 仮設住宅に引越すつて話になつてて。そんな、わけのわからないところに行くくらいなら、修一のとこに世話になろうと思つて。頼んだよ。

修一 ええ、そんな急に？

喜久江 もうどこでもいいからね、外の犬小屋スペースがあれば、ばあちゃんどこでも寝られるから。

修一 何言つてんの？

幸枝 あのと、よかつたら、空いてる部屋があるんですけど、お使いになります。

修一 水野さん？

幸枝 お役に立ちたくて。

喜久江 ありがとうございます。

幸枝 ご案内します。

喜久江 はい、それじゃ。

幸枝 (浩行に) あんたも。

修一 みんな知ってるの？

栄一郎 ご心配なく、大奥様のすることですから、誰も文句は言えません。私がちゃんと

お伝えしますから。

修一 栄ちゃん……。

幸枝、喜久江、浩行、栄一郎、出て行く。

修一 ……どうしよう？

尚人 ……。

夕日が濃い。

\* \* \* \* \*

### 三、さくらんぼ

5月の末。週末の夕方。

尚人がいる。

浩行がやってくる。

浩行 あれ、修ちゃんは？ 被災地支援？

尚人 それは明日。今日は、なんか打ち合わせだって。もう帰ってくるんじゃない？

なんか用？

浩行 ちよつとね。

尚人 よかつたら、伝えとくけど。何？

浩行 いい、直接言うから。

尚人 何か飲む？ フェアトレードのコーヒー、あるけど。

浩行 いい。

浩行、腰を下ろす。

浩行 今日は何病院は？

尚人 休み。久しぶりの土曜休みなんで、来てみたら出かけるっていうし。向こうは基本的に時間が自由になるわけじゃない、フリーターに毛が生えたみたいなものわけだから。

浩行 そういふ言い方どうかと思う。

尚人 俺は、シフトで動いてるわけだから、こっちに合わせてくれればいいじゃない。

浩行 しょうがないじゃない、ボランティアががんばってるんだから。そうだよ、尚ちゃんも一緒に行けばいいんじゃない。ずっと一緒にいられるよ。

尚人 何度かつきあつて行つたけど、なんだかさあ。

浩行 どうかした？

尚人 全然かまってくれないんだよ。他人みたい。

浩行 遊びに行つてんじゃないんだから。

尚人 やつてゐることは遊びなわけよ、避難所になつてゐる小学校や中学校に行つて、空いた教室に子供集めてさあ、鯉のぼりつくつたり、貝殻や葉っぱでスタンプおしてバッグつくつたりして。

浩行 楽しそうじゃない。

尚人 楽しいんだけどね。なんていうかさ、俺は自分のことオープンにしてるわけよ。

浩行 職場でも。だから、一緒にいるときもそのつもりでいるわけ。でも、修ちゃんはそうじゃないから。

尚人 うーん、見ればわかるつてタイプでもないもんね。尚ちゃんと違って。

浩行 ちよつと待つて、俺そんなバレーバレー？

尚人 うん。

浩行 嘘でしょう？

尚人 自覚がないからダダもれになつてゐるんだと思うよ。

浩行 それ人のこと言える？

尚人 言えるでしょ。

浩行 自覚がないからダダもれになつてゐるんだと思うよ。

にらみあう二人。

尚人 ああ、ごめんごめん。話そうよ。

浩行 何を？

尚人 どうすればいいと思う？

浩行 引越してきちゃえば？

尚人 だよな？ そうだよな。

浩行 ここだってまだ部屋あるんだしき。ていうか、付き合つてゐるなら、別に一緒でもかまわないよね。いや、かまうか？

尚人 俺は全然かまわないんだけど、なんだか気ままな一人暮らしっての、こたわりがあるみたいでさ。

浩行 おばあちゃんもいるし。

尚人 そうなんだよ。いくらカミングアウトしてるからって、おばあちゃんの目の前で同居ってどうなんだろうって。

浩行 それって、ほとんど嫁と姑？

尚人 おれが嫁だったら、同居はしたくないなあ。

浩行 付き合っただのくらい？

尚人 もうじき一年。

浩行 たしかに一番会話が少なくなる時期かも。

尚人 すごいね。専門家？

浩行 修ちゃんが一番でいたい気持ちもわかるな。近所の目もあるし。僕もけっこう気使うもん。派手なビキニは部屋に干すとか。

尚人 うん、それ大事。

浩行 それに決まった相手ができると、落ち着いちゃうからね。そういうのやなのかも修ちゃん。

尚人 ちよっと待って。何それ？ 落ち着いちゃだめなわけ？

浩行 実際、落ち着いてるわけだからさ。俺だって、今以上に落ち着きたいわけだし。

尚人 じゃあ、なんで他の男捜してんの？  
え？

iPhoneを差し出す。

浩行 いつログインしても、一番近くにいるゲイって尚ちゃんなんだよね。

尚人 何、まだグライダー使ってるの？ 今はもうジャックドの時代だよ。

浩行 なんていつまでも登録してあるわけ。もう修ちゃんがいるのに。

尚人 友達探してるんだよ。友達。

浩行 友達探すアプリじゃなくない？

尚人 最初のきっかけがこれだったから。

浩行 でも、修ちゃんやめてるよね。

尚人 タイミングを失してるわけ。それだけ。

浩行 頼むからやめてくれないかな。ほんと気持ちが悪いわするから。

尚人 でもさあ、一番近くて20キロとかいうより、なんだかよくない？

浩行 知り合いがこういうことしてるのって、微妙でしょ？ じゃあ、グライダーだ  
けでもやめてよ。  
わかったよ。

尚人 今すぐ。

浩行 はいはい。

尚人 はいはい。

尚人、iPhoneを操作しながら。

尚人 ねえ、浩行が修ちゃんと知り合ったきっかけって何なの？

浩行 ここに越してきたから。

尚人 そうじゃなくてさ、ゲイだったこと話したわけでしょ？ おばさんだって、知ってるわけだし。修ちゃんのこと。なんでなわけ？

浩行 修ちゃんに告白したんだけど、振られて、落ち込んでたら、母さんが心配して、もういいやと思つてカミングアウトしたら、母さんが落ち込んで、修ちゃんが心配して相談に乗ってくれたときに、自分もそうなんだって話してくれたんだよ。

尚人 え？ 何？

浩行 母さんすごく感謝してさ、いい人に来てもらったって。

尚人 いや、そうじゃなくて、何、修ちゃん好きだったの？

浩行 うん。昔の話だけど。

尚人 昔って？

浩行 三年前。修ちゃんから聞いてないんだ。

尚人 うん。

浩行 退会した？

尚人 はい。

iPhoneを差し出す。

確認する浩行。

浩行 よし。

修一が入ってくる。

修一 ただいま。

浩行 おかえりなさい。

(強く) おかえりなさい！

修一 ただいま。これ、おみやげ。

テーブルの上に置く。

尚人 さくらんぼ？

浩行 早いね。まだ五月なのに。

修一 早生の品種なんだって。来月、被災地の子供たちをサクランボ狩りに呼んでくれるって話があつてね。今日、話しに行ってきたんだよ。それでお土産につて。

浩行 決まりそうなの。

修一 向こうからのバスをどうするかなんだよね。それが押さえられれば大丈夫。

浩行 よかったね。

修一 おばさんにもよかったら。

浩行 ありがとう。

尚人 あのさあ、俺、やっぱりここに……

浩行 ねえ、修ちゃん、こないだ相談した件なんだけど。

修一 ああ、どうなった？

尚人 何、相談って？

修一 被災地や避難所にいるゲイのサポートができないかって話だよ。

浩行 うん。仙台のグループが動いてるみたいなんだけど、メンバーの中に被災してる人もいたりして、大変みたいなんだよね。

修一 「あんちゃんこ」の人たちでしょ。僕もネットで見た。

浩行 被災地にいるセクシュアルマイノリティのサポートをします！って言っても、なかなかオープンにはできないし、ネットもまだ復旧してないし。

修一 そう、ネットの情報が届かない人こそ困ってるだろうから。

浩行 でも、やっぱりネットかなと思ってツイッターで呼びかけてみたんだ。

修一 ツイッター？

浩行 そしたら、結構、問い合わせがあつて。被災してる人やボランティア希望の人から。で、今度集まってミーティングしようと思ってるんだけど、ここ貸してもらえないかな？

修一 いいよ。日にち決まったら教えて。

浩行 うん。良かったら修ちゃんも。

修一 うん。

尚人 ちよつと待って、そんな不特定多数が集まる場所にしちゃっていいわけ？

浩行 どの口がいうか。自分こそ、不特定多数求めてるくせに。

尚人 それとこれとは違うって。

浩行 じゃあね。

浩行、出て行った。

尚人 ねえ、僕らの静かな暮らしはどこに行つたわけ？

修一 何？ 静かじゃない？

尚人 もう次から次へと。

修一 大丈夫、これ以上どうにもならないって。

尚人 ほんとだよ。修ちゃんの親戚一同大集合なんてことになったらやだからね。

修一 まさか、そんなことあるわけない。



入り口に立つ、一人の女。それは、宮坂奈津子。

奈津子 ごめんください。あの、「アトリエみやさか」ってこちらでいいんでしょうか？

修一 はい、そうですけど。

奈津子 ……修一さん？

修一 はい。え、……なつちゃん？ なつちゃんだよね！

奈津子 はい。おひさしぶりです。

修一 どうしたの、急に？

奈津子 ばあちゃんに会いに。

修一 一人？ 亮二は？

奈津子 栄ちゃんの車に乗せてもらいました。今、ばあちゃんところに行っただんですけど、いなくて。ちよつと探してくるって。待ってる間、ここ、のぞいてみたらつて言われて。

修一 ばあちゃんは、浜で宇宙の散歩してんだよね。

奈津子 宇宙？

修一 うちの犬。

奈津子 犬いるんですか？ いいなあ。うちの方じゃ、避難所にペット連れてけなくて、

野良犬や野良猫になるしかなくて。

尚人 牛や豚でしょ？ ひどい話だよね。

奈津子 あの…

尚人 どうも。お噂はいろいろ。鉄男と鉄子って。

奈津子 そんなことまで？

尚人 亮二、どうしてる？ 仕事の方は？

奈津子 まだまだ立ち直れてないんですけど、でも、がんばってます。

尚人 鉄男の方は？ 新婚旅行JR全線制覇したの？

奈津子 結婚してから休みごとにチャレンジして、去年の暮れにクリアしました。

尚人 すごいね。

亮二 亮二、几帳面だから。

奈津子 最近は、震災で不通になった路線を見に行ってみようって。この間も、三陸鉄道

北リアス線に。

尚人 三陸鉄道北リアス線？

奈津子 岩手の久慈から宮古へ行く路線なんです。すっかりなくなってます。線路が突然終わってるんです。大きなカーブかと思って歩いていたら、何もなくて。ショックでした。思い出の場所だったんで。

尚人 思い出？

奈津子 初めてのデートで来たところだったんで。

尚人 へえ。

奈津子 あの、さつきから、私のこと、すごくよくご存じですけど？

尚人 ああ、ごめんごめん。僕は、修ちゃんのパートナーの渡部尚人つていいいます。  
奈津子 パートナーって？

尚人 このアトリエのとかじゃなくて、つきあってるって方の。

修一 いや、あの……

尚人 いいじゃない。もうカミングアウト済みなんだから。十年も前に。

奈津子 やっぱり！ そうですよね。

尚人 まあね。

奈津子 じゃあ、今もそうなんですね。

奈津子、無言で二人を指さす。

尚人 もちろん！

修一 おい！

奈津子 あのお願いがああるんです。私を、私をここに置いてください。

修一・尚人 は？

修一 ちよつと待って、話が全然わからない。

奈津子 わからなくてもいいです。何も言わずに私をここに置いてください。

尚人 それは無理でしょ。

奈津子 じゃあ、ちよつと言います。私、行くところがないんです。

修一 亮二はどうしたの？

奈津子 あの人は、だめなんです。これでどうですか？

尚人 どうって言われても？

奈津子 私、妊娠してるんです。

修一・尚人 ええ？

奈津子 私、もうじき三十になります。跡取りを早く早くって期待されてるのわかってるくせに、まだいい、まだいいって。私、それで、ちよつと考えて、いや、やっちやえって。で、あれをちよつとあれして。

修一・尚人 ええ？

修一 そんな簡単に？

奈津子 簡単じゃないです。大胆さと繊細さが必要でした。そして、ついにできたんです。

尚人 赤ちゃん？

奈津子 はい。早速、報告することになりました。少し元気がないから、きつと喜んでくれるだろうと思ってる。

修一 それって、いつの話？

奈津子 三陸鉄道北リアス線の帰り。先々週の日曜日です。

亮二が登場、テーブルに腰掛けると、そこは彼が運転する車の運転席。  
奈津子はとなりの助手席に。

修一と尚人はその様子を少し離れて見ている。

奈津子 元氣出して。

亮二 復興できたらしいよね。でも、大変だろうな。第三セクターじゃ。

奈津子 きつと大丈夫だよ。地元に愛されてる路線だもん。

亮二 だいたいんだけど。

間

奈津子 あのね、報告があります。

亮二 なに？

奈津子 宮坂酒造の復興のタネって言ったらしいかな？

亮二 何、流された酵母菌？ 見つかった？

奈津子 そつちじゃなくて、こつち。

と自分の腹を指す。

亮二 ん？

奈津子 だから赤ちゃん。（自分と亮二を順に指さしながら）あかちゃん！

急ブレーキ。

亮二 なんで？

奈津子 神様からのさずかりものに決まってるでしょ？

亮二 だって、そんなはずない。絶対に。

奈津子 絶対なんてことはないんだよ。

亮二 その神様って、もしかして奈津子じゃないの？

奈津子 そうとも言えるね。でも、出来ちゃったモノは出来ちゃったんだから、素直に喜んで。

亮二 そんな……

奈津子 大丈夫、二人で力を合わせて育てよう、みんなも応援してくれる。はい、リピートアフターミー。

亮二 今、どのくらいなの？

奈津子 二ヶ月。

亮二 じゃあ、あのホテルに行ったとき？

奈津子 ピンポーン、ピンポーン！

亮二 ……。

奈津子 早く帰ろう。みんなに報告しないと。ほら。

亮二、発車する。

奈津子　トラック多いね。これみんな被災地支援なのかな？　もう少し先行くと、警戒区域でしょ。震災のすぐ後、この道、避難する車で身動きとれなかつたっていうよね。しかもみんな東電の社員の車だって。みんな、まだ放射能のこと何も知らされてないうちに、自分達だけはちゃんと知ってて。ひどすぎるよね。

亮二、車を止める。

奈津子　どうしたの？

亮二　あのさ、またにしないか？

奈津子　え？

亮二　だから、産まないでほしい。

問

奈津子　意味わかんない。だって、せっかくできたんだよ。

亮二　でも、今ならまだ……

奈津子　無理無理。絶対。

亮二　なんで、そんなことするんだよ。どうして待つてられないのかな？

奈津子　いつまで待つてばいいの？　もう少しもう少しして。ほんとは子供ほしくないんじゃないの？

亮二　うん。

奈津子　あんなことしといてよくそんなこと言えるね？

亮二　俺はちゃんとしてたつて。

奈津子　でも、できたんだから、それはそれとして、喜ぶべきでしょう。

亮二　喜べないよ。

奈津子　あんたの子だよ。わかつてる。私とあんたの。

亮二　わかつてる。

奈津子　じゃあ、どうして？　子供きらいなの？

亮二　どちらかと言えば。

奈津子　そんなの聞いてない。

亮二　だって、言えないだろ。

奈津子　私は、跡取り待つてる父さんや母さんの期待に応えたくて。

亮二　俺の気持ちはどうなんだよ。

奈津子　私の気持ちはどうなるの？

亮二　……。

亮二、発進する。

奈津子 私産むよ。産むから。

亮二 落ち着いて考えてよ。今、大変じゃないか。住むところだって、これからどうなるかわからないし。無責任だよ。

奈津子 だって、知らなかったんだもん。地震が来るなんて、津波や放射能が来るなんて。

私のせいなの？

亮二 そうじゃないけど、もう前とは違うんだよ。

奈津子 意味わかんない。ちよつと止めて。説明して。どう違うのか？

亮二、止めない。

奈津子、ブレーキを無理矢理踏む。

亮二 おい！

車、無理矢理止まる。

亮二 この頃、流産増えてるっていうし。中絶する人も増えてるっていうし。

奈津子 放射能？

亮二 ネットで話題になってる。

奈津子 そんなのデマだって。

亮二 でも、わからないだろ。

奈津子 そんなデマ信じて、赤ちゃん殺せっていうわけ？

亮二発進しようとするが、奈津子が止める。

亮二 何すんだよ？

奈津子 私だって、こわいよ。だから、一緒に育てようって言ってほしいの。言っつてよ。大丈夫、俺に任せろつて。二人で育てようつて。リピートアフターミー。

亮二、発進するが、それは拒否の態度。

奈津子、しばらく運転する亮二を見ているが、そつと降りて離れる。

一人で運転している亮二。

それを見ている奈津子。

亮二、やがて車を止めて、降りて、退場する。

奈津子 私、まちがってますか？

修一と尚人顔を見合わす。  
喜久江が登場。

喜久江 まちがってない。なかなかやるでないの。  
修一 ばあちゃん！

喜久江 でも、そんなことするより、早く、父さんや母さんに言っ  
てしまえばよかったの  
に。

奈津子 でも、力尽くはいやなんです。

尚人 十分力尽くだと思っただけ。

喜久江 なんて、ここに来たの？

奈津子 亮ちゃんと話したあと、私、実家に帰ったんです。今、宮坂酒造は栄ちゃんの実家に間借りしてる状態なんで、理由は聞かれませんでした。実家の母に相談したんです。そしたら、亮ちゃんの言うのはもつともだ。今はやめておけつて。今回はなかつたことにしよう。哀しいけどつて。哀しいけどなかつたことにしようつて。どういふことですか？ 哀しいこといっばいあつたけど、でも、それをなかつたことにしちゃだめなんじゃないですか。ていうか、また哀しいこと生み出してどうするんですか？

問

奈津子 で、ばあちゃんを頼つて、ううん、ほんとに修一さんを頼つてここに来ました。私をここに置いてください。

修一 置いてくださいって。

奈津子 今、2ヶ月です。3ヶ月になったら、もう中絶はできない。あと少しなんです。

修一 そのあと少しの間を、どこか、ほつとできる場所でも過ごしたかったんです。

修一 ほつとできる場所。

奈津子 ほつとできるじゃないですか。想像どおり。こんなに温かくて、やさしいものがいっばいで。

修一 それ、誤解だから。

奈津子 誤解でもいいんです。ここにいさせてください。

問

尚人 いいんじゃない。ここにいれれば。

修一 おい。

奈津子 ありがとうございます！

尚人 俺は賛成。気をつけないと。今が一番微妙な時期だよ。うちの病院に来たらいい

よ。産婦人科あるから。

奈津子

お医者さんですか？

尚人

ちがうちがう。白衣の天使。

奈津子

……。

喜久江

どこに住むことにする？

尚人

ここでもいいし、いいよね？

修一

さつきはあんなにいやがってたのに。

喜久江

私のところ来ればいい。ここには毎日顔出せば。

奈津子

はい！ ありがとうございます。

喜久江

じゃあ、おいで。

奈津子

はい！

喜久江と奈津子、そして尚人退場。

間

栄一郎がやってくる。

栄一郎

こんにちは。奈津子さんの荷物、どこに持って行きますか？

修一

ばあちゃんの次はなつちゃん。どういふこと？

栄一郎

私はただ、お手伝いをしています。

修一

何の手伝い？

栄一郎

(無視して) じゃあ、こちらに持ってきますね。それじゃ。

修一

ああ！ ばあちゃんの部屋だつて。

栄一郎

はい、かしこまりました。

栄一郎、出て行く。

修一、一人残った。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

#### 四、そうめん

7月下旬の日曜の午後。いい天気。

室内。テーブルに、斉木守と錦織和寛。

斉木は、そうめんの薬味をきざんでいる。

錦織は、自分の肩を叩いたり、首を回したりしている。

浩行がやってくる。

浩行 お疲れ。薪終わった？

錦織 うん、積んであったの全部。

浩行 全部割ったの？

多い方がいいと思って。

斉木 さすが、カズくん、自衛官は違うね。

錦織 それはちよつと……。

もてもてなんじゃないの？ ゲイのJ官なんて。

斉木 ファン多いよね。

震災の後なんて特にそうじゃない？

錦織 わざわざ言わないから。非番の日には忘れていたいで。いろんなこと。

大変だったっていうもんね。救助活動とか。

だから……

浩行 ああ、ごめん。

次は何を？

浩行 そうめんはみんな揃ってからゆでるんで、まずは薬味の準備かな。

斉木 こんなもんでいい？

うん。シソはそんなんでいいから、あとミョウガとネギも。

錦織 じゃあ自分も。

お願いします。

錦織、包丁を手に薬味を刻み始める。

斉木 ねえ、これって、ここの庭で取ったやつ？

浩行 うん、修ちゃん、自給自足目指してるから。まあ、まだまだむりなんだけど。このくらいはね。

大丈夫かな？

ええ？

浩行 セシウムとか。

大丈夫でしょ？ この辺、あまり高くないから。

斉木 計ってみたの？

え、計ってないけど。平気だよ。

浩行 じゃあ（手にとって）このミョウガだけやめない。こういう地面に近いところのものって、あぶない気がするんだよね。

錦織 薬味でちよつと使うだけだから、問題ないんじゃない？ もしそうだとしても。

そうだよ、斉木さん、食べなきゃいいわけだし。

浩行 ややや、そういう問題じゃないでしょ。意識っていうの？ 身近なところから気をつけてかないといけないんじゃないかって。

浩行 はいはい。（錦織に）斉木さん、野菜、関西や九州から取り寄せてるんだよ。気



にしすぎだよね。

斉木 できることはしといた方がいいじゃない。

錦織 したくてもできない人がどれだけいるかって話だよね。あ、そういう意味じゃなく。

斉木 そういう意味ってどういう意味？

浩行 じゃあ、やめる？ ミヨウガ？ なかったことにする？

斉木 なかったことって言っても、庭にいっぱい生えてるしね。これなしにしても、また取ってこようってことになったら。

錦織 うーん。

浩行 じゃあ、自己責任。自己責任ということはどう？

斉木 そういうことなら。

問

浩行 カズくん、それ刻みすぎだと思う。

錦織 なんで？ 大勢くるんでしょ？

浩行 あ、それなんだけど、あと2人なんだよね。

斉木・錦織 ええ？

浩行 やっぱりここ遠いみたいで。

錦織 そんなの初めからわかってたじゃない。

斉木 流しそうめんとバーベキューっていうのがよくなかったんじゃない？

錦織 たしかに地味だよね。

浩行 なんでそういうこと言うかな。話し合っただめたんじゃない！

斉木 まあ、そうだけど。

浩行の携帯が鳴る。出る。

浩行 あ、はい。どうも。じゃ、今行きます。すぐなんで。(切って) 迎えに行ってくるね。

斉木 はーい。

浩行、出て行く。

奈津子と喜久江がやってくる。

奈津子 みんな揃いました？

斉木 もうじきです。尚ちゃんに迎えに行ってもらってるんだけど、待ち合わせ失敗してるみたいで。今、浩行くんが。修ちゃんは？

奈津子 スーパーに買い物に行ったんで、もうじき。

喜久江 そろったら連絡しようだい。そうめん茹でるから。

錦織 じゃあ、これ（と薪を渡そうとする）。

喜久江 ああ、平気平気、ガスで茹でるから。その方が簡単だ。

錦織 ええ？

喜久江 なつちゃん、肉味噌つくろうかね？

奈津子 いいですね。じゃあ、尚人さん戻ったら連絡下さい。

斉木 はい。

喜久江、奈津子、出て行く。

錦織 誰？

斉木 修ちゃんのおばあちゃんと妹さん。妊娠三ヶ月。

錦織 なんか参加する気まんまんみたいだけど。

斉木 参加するみたいだよ。

錦織 なんで？ 今日の集まりって……

町の飲み屋に行っても店の人はいるわけでしょ。そういうもんだと思ってくれればいいわけ。浩行くんのお母さんがいないだけ、よかったと思わなきゃ。

錦織 そうなの？

斉木 そうそう。

浩行と唯史がやってくる。

浩行 どうも。

唯史 遅くなりました。

浩行 えーと、タダシさんです。くわしい紹介はみんな揃ってから改めてということ。

斉木です。

錦織 カズです。J官してます！

浩行 あれ、言っちゃうんだ。

唯史 どうも。

浩行 あと一人来たら全員なんで。もう少し待っててもらえますか？

唯史 はい。外のある、流しそうめん？

浩行 でかすぎでしょ？ こんなふうについて説明したら、なんだかすごいのができちゃつて。裏山から竹切り出して来て。

唯史 子供の頃、うちでよくやったの思い出します。ああいうの作って、流しそうめん毎年やってました。

斉木 へえ、そうなんだ。

唯史 何か手伝いますか？

浩行 大丈夫です。もうすぐなんで。（斉木に）尚ちゃんに電話してみてくれる？

斉木  
うん。

斉木、電話をする。

亮二が登場。入り口に立つ。

亮二  
あの……

斉木  
だめ、つながらない。

浩行  
(亮二に気づき) あ、どうも。あの……

亮二  
はい？

浩行  
ああ、お待ちしました。どうぞ！

亮二  
はあ、すみません。

亮二、入ってくる。

唯史  
(亮二に気づき) 兄ちゃん……

亮二  
唯史、お前、なんで？

唯史  
兄ちゃんこそ。

亮二  
俺は……

浩行  
兄弟？

斉木  
うわ……

問

気まずい亮二と唯史。

浩行  
(唯史に) じゃあ、これ持って先に外に行ってるね。(斉木と錦織に) 行くよ。

斉木  
うん。

錦織  
え？

斉木  
いいから。

三人、出て行く。

亮二  
久しぶり。元気か？

唯史  
兄ちゃんこそ。

亮二  
ああ、こんなところで会うなんて、やっぱり……？

唯史  
そうだよ。

亮二  
そうだよな。他に理由ないもんな。やっぱり会うもんだなあ。会うんじゃないか

唯史  
と思ってたんだ。

唯史  
そうなの？

亮二 みんなには内緒にしておいてくれ。  
唯史 うん、こっちこそ。なっちゃん知ってるの？  
亮二 いや、知らない。ずっと話してないから。びつくりするだろうな。  
唯史 そりゃそうだよ。いいの、こんなことして？  
亮二 ずいぶん考えたんだ。でも、これまでなかなか決心がつかなかった。  
唯史 なっちゃん、妊娠したって聞いたよ。  
亮二 ああ。  
唯史 いいの？  
亮二 だから、それで来たんだよ。  
唯史 そうなんだ。でも、シヨックだな、三人のうち三人ともそうだったなんて。  
亮二 え？  
唯史 だから、三人のうち二人だけだと思ってたけど、三人ともだったわけでしょ？  
亮二 何が？  
唯史 だから、ゲイだったこと。  
亮二 兄貴が？  
唯史 だから三人とも。兄ちゃんと兄ちゃんと僕と。  
亮二 ええ、そうなの？  
唯史 違うの？ だって、だから今日ここに？  
亮二 ええ？

尚人が入ってくる。後ろには神田健吾。

尚人 ただいま！ どうも。あれ、みんなは？  
唯史 今、出て行きましたけど。あの……  
尚人 タダシさん？  
唯史 はい。  
尚人 あれ、そちらは？ あれ？  
亮二 兄ですけど？  
尚人 お兄さん？

修一と奈津子が入ってくる。

修一 遅くなってごめんね。道混んでてき。あれ、唯史、亮二、二人揃って何？ なっちゃん呼んだの？  
奈津子 知らない。  
唯史 修ちゃん、なっちゃんも。何でここに？  
修一 なんてって、だって、おれんちだし。  
唯史 ええ？ ちょっと待って。なっちゃんがここにいてってことは？ じゃあ、兄ち

やんは……

亮二 奈津子に会いに来たんだよ。そうしたら、何だかおかしなことになって。  
唯史 もう、先に言つてよ！

暗転。

すぐに明るくなると、しばらく後。修一、亮二、唯史、奈津子、尚人。

尚人 まあ、良かったんじゃない？ 久しぶりに兄弟三人そろつて。

唯史 ……。

尚人 まあ、よくある話だけども、世間は狭いってことだよ。

亮二 知らなかった。唯史もそうだったなんて。

唯史 ……。

尚人 ま、落ち込むことないよ。うん、言つてしまつて済むことなら、言つてしまつて  
限るつて言うよ。

修一 ずっと話してなかったんだ？

唯史 話す必要ないし。言つただろ、兄ちゃんがカミングアウトしたから、もう言えな  
くなつたつて。

修一 そうか。

唯史 何だよ、これ？ 畏？ 何かたくらんだわけ？

修一 まさか。

尚人 (亮二に) あの、一応、聞いておきたいんだけど、なつちゃんの旦那さんは、違う  
わけですよ？

亮二 はい？

尚人 いや、だから、なんていうか、なつちゃんに子供産むなつて言つたのは、実はそ  
れが理由だったりして？

亮二 それつて？

尚人 だから、兄弟三人とも？

奈津子 そうなの？

亮二 ……違うと思うけど。

尚人 あの、今日はどうして？

亮二 (奈津子に) 帰ろう、一緒に。

間

尚人 ちょっと席外そうか？

修一 ええ？

尚人 (奈津子に) ちゃんと話しなよ。そうめん、先に始めてるから、気にしないで。  
奈津子 うん。

尚人、修一、唯史、退場。

奈津子 どうしたの？ 私、来ないでって言ったよね？

亮二 ああ。

奈津子 いくら来ないでって言ったって来るよね普通と思ってたら、ほんとに来なかったくせに、今頃何？

亮二 悪かった。

奈津子 悪くないよ。

亮二 元氣そうだね？

奈津子 三ヶ月になったから。もう産むしかないから。

亮二 どうしたの？

亮二 帰ろう。

奈津子 どこに？

亮二 うちに。

奈津子 うちなんてないじゃない。

亮二 そうか、ないか。そうだな。

問

亮二 いや、違う。うちはないかもしれないけど、帰るところはないかもしれないけど、でも、うちはある、帰るところはある、帰ってこいって、言わなきゃいけないんだって、そう思っで。それが父親になるってことなんだろうって。そう思うんだ。

問

奈津子 父親になるんだ？

亮二 うん、なる。

奈津子 うん。

亮二 だから……

奈津子 でも、私、ここにいたい。

亮二 ええ？

奈津子 亮ちゃんの気持ちわかったから、でも、ここにいて。ここで産むのがいいと思うんだ。

亮二 ここで？

奈津子 うん。ばあちゃんもいるし、実家にいるよりずっといい。お腹の子にもいいと思うんだ。だから……

亮二 でもさあ……

奈津子 だから、また会いに来てよ。

亮二 ……。

奈津子 お父さん、怒ってるのは知ってる。でも、そうしたいの。

亮二 わかった。

奈津子 そうめん食べてかない？ みんなと一緒に。

亮二 邪魔じゃないのかな？

奈津子 兄弟三人揃うのなんて、ほんとに久しぶりなんでしょ？ ね？

亮二 そうだな。行くか？

奈津子 うん。

二人出ていく。

場面はゆつくりと夕暮れの浜辺に変わって行く。

修一と健吾が歩いている。宇宙も遠くを走っている。波の音。

健吾 今日は楽しかったです。ありがとうございます。

修一 なんだか、よくわからない集まりになっちゃって、ごめんね。

健吾 いいんです、全然。ゲイばかりっていうのより、よかったかもしれない。久しぶりに家族と一緒にいるみたいな気がしました。

修一 だったらいいんだけど。

波の音。

健吾 何があったか聞かないですね。

修一 うん、取材してるわけじゃないから。

健吾 聞いてもらっていいですか？

修一 ええ？ いいよ、僕でよければ。

問

健吾 地震があったとき、僕は部屋にいたんですけど、すぐに飛び出しました。立っていられないくらい揺れが長く続いて。遠くから地鳴りが響いて、あちこちから悲鳴が聞こえてきました。揺れが収まったら、ものすごく静かになって。停電したんです。津波の警報も鳴りませんでした。とりあえず片付けなれないと思って、家の前の道の掃除を始めたんです。なんでそんなことしたのか分からないんですけど、逃げなきゃとは全然思いませんでした。しばらくしたら、家にいた父親が「逃げろ！」って叫んだんです、二階から。「津波だ、早く逃げろ！」って。振り返ったら、向かいの家と家の間の路地から黒い水が流れてきました。真っ黒な水です。それが足元に来て、どんどん深くなって……。うちは鉄骨の二階建てで

耐震構造、何も心配はいらないって父は自慢してたんです。だから、家に飛び込んで、二階に駆け上がりとうしました。二階には父と妹がいたんです。でも、階段の途中で水に呑み込まれました。あとのことはよく覚えていません。家は、土台だけを残して全部流されてしまいました。僕は100メートルほど離れた家の屋根にしがみついているところを助けられました。父と妹は家と一緒に流されているのを発見されました。溺死だったそうです。買い物に出ていた母が見つかったのは一週間後でした。なんで僕だけ助かったのか、わからないんです。どうしてなんだろうって。どうしてなんでしようね？

助けてくれたんじゃないかな、ご家族が。  
そんなことしなくてもいいのに。

問

健吾 先週の手作り教室で、子供たちと一緒に流し灯籠を作ったじゃないですか？お盆に海に流そうって。「ごめんなさい」って書いてる子が何人もいて、ああ、みんなそう思ってるんだなあって。「ごめんなさい」って。そんなふうに思うことはないんだよって、僕、その子には言いましたけど、でも、僕もそう思っていないとはいえないなあって。したら、宮坂さん言ったじゃないですか。「じゃあ、その気持ちを海に流そう」って。「その気持ちはきつと届くよ」って。うれしかったです。

問

健吾 初めて話しました。ありがとうございます。宇宙！

犬の吠える声。

健吾 また来ます。それじゃ。  
修一 ゆっくりしてってもいいんだよ、もう遅いし。  
健吾 大丈夫です。唯史さんが送ってくれるっていうんで。

健吾、去っていく。  
亮二がやってくる。

亮二 じゃあ、行くわ。  
修一 うん。  
亮二 奈津子のこと、頼むわ。あ、もうすっかり世話になってるんだけど。じゃあ、また来るよ。



修一 うん、いつでも来てよ。  
亮二 うん。

亮二、去って行く。

間

栄一郎がやってくる。

栄一郎 いい浜ですね。思い出します。子供の頃、防波堤を自転車で走りましたね。どつちが早いかつて。

修一 あの防波堤ももうないんだね。

栄一郎 ええ。

修一 あの頃は、いつも栄ちゃんとはばかり遊んでたんだよね。

栄一郎 喧嘩もしましたけど。殴り合いの。

修一 したした、うちのオヤジに怒られた。

栄一郎 負けるなつて？

修一 殴るならグーで殴れつて、平手打ちはよせつて、男らしくないつて。言われてみればそうだよね。

栄一郎 でも、喧嘩ですから。

修一 ねえ、栄ちゃんに話したとき、どう思った、おれのこと？

栄一郎 別に何も。

修一 またまた、いいから言つてよ。もう昔の話なんだからさあ。

栄一郎 じゃあ、言いますけど、そりゃびつくりしました。

修一 だよね。

栄一郎 でも、あの頃のことだけだと思つてたんです。だから、高校に入つて、女の子が好きになりましたし。

修一 おれもそう思つてたけど、そうじゃなかったんだよね。

間

栄一郎 娘からメールが届くようになりました。

修一 名古屋にいる？

栄一郎 転校するのいやだつて泣かれたんですけど、しばらくしたら帰つてこれるからつて。まあ、いつになるのかわからないんですけど。

修一 うん。

栄一郎 そうだ、いいニュースがあります。酵母が見つかったんです。県の試験場に出してたサンプルが生きてたんですよ。これで相馬寿が途絶えることはなくなりました。社長、山形の知り合いの酒蔵に頼み込んで、そこで酒造りを再開しようときられています。

修一 そうなんだ。

栄一郎 これまでよりずっと近くなります。

修一 まあ、そうだね。

栄一郎 修一さん、帰って来られたらどうですか？

修一 それはないでしょ。

栄一郎 じゃあ、顔出すだけでも。

修一 無理無理。

栄一郎 なんですか？

修一 勘当されてるんだよ。

栄一郎 もう時効じゃないですか。殺人だつて十五年で時効になるんですよ。

修一 それは昔の話。今は時効ないから。

栄一郎 そうなんですか？

修一 それに勘当されてからまだ十年だから。(栄一郎に近づき) 残念だったね。

栄一郎 (修一に近づき) それじゃあ、また来ます。

栄一郎、歩き出すが、振り返り。

栄一郎 あきらめませんから。

栄一郎、退場。

修一、栄一郎を見送るが、海を見ている。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

## 五、芋煮

十月下旬。寒い日曜日。

修一、尚人、浩行、斉木、唯史、健吾

健吾 薪ストーブってあったかいね。

修一 でしょ？

唯史 遠赤外線。

尚人 暖かくなるまでが大変なんだけどね。朝とか。

唯史 さりげなく、一緒に住んでるアピールだね。

尚人 ふふふ。

浩行 ねえ、カズくんは？

斉木 ああ、今日は来れないって。演習とか訓練とかだった。

浩行　すごいねえ。  
尚人　ほんとは唯史くんに振られたからじゃないの？  
唯史　そんなことないんじゃないかな？  
齊木　いや、ああ見えて結構傷つきやすいから。鋼の体に仔猫のハート。

間

尚人　よし、じゃあ、話戻すけど、なんで外じゃだめなわけ？

浩行　そうだよ。ただの芋煮会だよ。

齊木　だって、この集まりはさあ……

尚人　でも、ただ見ただけじゃわからないじゃない。

浩行　そこまで気にする必要はないと思う。

齊木　でも、こうまで男ばかりってのはどうかと思う。

尚人　別に男ばかりだって、いいじゃない。

浩行　そういうグループけっこうあると思うよ。

齊木　でも知り合いに会うとめんどろなんだよ。

唯史　ていうか、齊木さんが気にしてるのは、男ばかりなんだけど、ただの男ばかりじゃ

やないかんじがダダ漏れしてしまうからってこと？

尚人・浩行　ええ？

尚人　俺

浩行　僕？

尚人・浩行　そんなことないでしょ？

齊木　まあ、ストリートに言えばそういうことかな。

尚人　ちよっと待って、齊木さんさ、わざわざ結婚指輪してるよね。結婚もしてないのに。

齊木　これはカムフラージュだつて。

尚人　だったら、いいじゃない。これ見よがしに指輪みせびらかしながら、芋煮すれば。

尚人、手をひらひらさせてみせる。

唯史　それって、かえってバレるかんじ。

齊木　却下。

尚人　あのさ、なっちゃん亮ちゃん、それにばあちゃんも行くんでしょ？ 何が問題？

修一　だめだって、なっちゃん、7ヶ月なんだから、大事にしないと。ばあちゃんだつて、この寒い中、風邪でも引いたら。

唯史　たしかに寒さをおしてまで、行く必要もないよね。

齊木　そうだよ、ここでみんなでやったつていいんじゃないの？

尚人　芋煮は昔から川原でやるもんだつて決まってるでしょ？　うちの中でやったら、

ただの鍋だつて。

どこでやったつて同じ味だつて。

違うね。全然違う。

もうどつちでもいいから、決めない？

はい、じゃあ、決をとります。川原でやってる芋煮会に参加してもいいって人。

尚人が挙手。

尚人 ええ、俺だけ？（浩行に）なんだよ裏切り者。

修一 じゃあ、ここでやろうっていう人。

残りの全員が挙手。

修一 はい、じゃあ、決まり、ここでやります。支度しようか。

一同、席を立つ。

尚人 修ちゃん、バレルのいやなんだ。

修一 また？ 別にそういうんじゃないって。

尚人 だつてさあ……意味がわからない。

浩行 尚ちゃんおとなげない。

尚人 どうせ俺はバレバレですよ。修ちゃんさ、みんなが来るようになってから、なん

だか野郎ぶつてるかんじだよ。

修一 そんなことないって。

浩行 そうだよ、修ちゃん元々おねえ入ってないし。

尚人 まあ、そうだけど、これまで以上に男ぶつてるってこと。俺が言いたいの？

修一 男ぶつてるのは自分じゃないか。何、人のせいにしてんだよ。

尚人 俺がいつ野郎ぶりしました？

修一 今だよ、今の今。

尚人 これは俺の地なんです！

唯史 ほんとどうでもいい会話だよ。

浩行 うん。

齊木 支度しよう。健ちゃんも。

健吾 はい。

尚人 ばあちゃんとなつちちゃんが来てからさ、もう気分は嫁なわけ。姑と小姑。俺はけ

なげにつくしてるのに？

修一 そんなこと頼んでないじゃないか。

尚人 わかった、じゃあ、鬼嫁になつてやる。敬老の日反対！つて姑に松茸投げつける

鬼嫁になつてやる！

浩行 意味わかんない。

万里子 誰が鬼嫁だつて？

万里子が入ってくる。

間

修一と万里子、お互いをじっと見てさぐるように近づいていく。

修一 母さん！？

万里子 あんた……老けたねえ。

修一 何それ？！

万里子 わかつてる、私もね。

修一 何しに来たの？ 人には帰ってくるなって言っておいて。

万里子 だから来たんでしようよ。あ、あんたの顔見にじゃないから、なっちゃんとはあちゃんの様子見にきたんだから。（その場にいる一同に）どうも、初めまして、修一と唯史の母です。

一同にあいさつ。

一同もあいさつ。

万里子 まあ、芋煮かい。いいね、ここに来る途中の川原も人がいっぱい。よかつたら、

お相伴にあずかってもいいですか？

修一 母さん。

万里子 栄ちゃん。

栄一郎 はい。

一升瓶をテーブルの上に置く。

修一 相馬寿。

万里子 今年の新酒。といつてもまだまだ試作品だけだね。なんとか作ってみたのよ、父さんが。まだ売り物にはならないって言ってるけど同じ味よ。みなさん、どうぞ飲んで下さい。

斉木 ありがとうございます。

万里子 じゃあ、みんなで行きましょうか？ 栄ちゃん、車に私とばあちゃんとなっちゃん乗せて。

栄一郎 はい。

万里子 それじゃあ。

万里子、出て行こうとする。

修一 外には行かないんだって。

万里子 なんて？

修一 ここでやることになったの？

万里子 何おかしなこと言ってるの？ 芋煮って言ったら、川原でしょうよ。

修一 寒いし、ばあちゃんとなつちゃんによくないだろうからって。

万里子 平気平気。大勢で楽しくやりましょう。

浩行 どうする？

斉木 行こう！（万里子に）よろしくお願いします。

万里子 あなたは？

修一 渡部尚人。僕のパートナー。

尚人 一緒に住んでます。

万里子 一緒についてことは……？

尚人 そういうことです。よろしくお願いします。おかあさん。

万里子 あ、いえいえ、こちらこそ。

修一 じゃあ、行くよ。

尚人 うん。

修一、尚人、浩行、健吾、斉木、それぞれ芋煮の支度を手にして出て行く。

万里子、一緒に行こうとする唯史を呼び止めて。

万里子 唯史。

唯史 なに？

万里子 あの人、どんな人？

唯史 看護師してる、市立病院で。

万里子 そうなの。長いのかい、修一とは？

唯史 自分で聞きなよ。

万里子 でも……

唯史 兄ちゃんと話すって決めたんだつたら。

栄一郎が奈津子、亮二、喜久江と一緒にやってくる。

万里子 ばあちゃん。なつちゃん。

喜久江 ああ、遅かったね。

万里子 道混んでいて。それで考えたんだけど「父さん、長くないんだわ」っていうのはどうかね？

亮二 何、突然。

万里子 そのくらしいのインパクトがないと会おうって気にならないんじゃないかと思つて。

唯史 そんな、だますの？

万里子 人聞きの悪い。奇跡的に回復したつて言えばいいじゃない。

栄一郎 問題ないと思います。

唯史 ちよつと待つて、そんなことしたら、また気ままずくなるんじゃない。父さんが、そのこと知つたら。

喜久江 会つてしまえばいいんだつて。とにかく顔を合わせれば。後のことはどうにでもなるから。

奈津子 私もそう思います。

唯史 そんなむちゃくちゃな。

万里子 車ですぐの距離なのになんでこう遠いまんまかね。

唯史 だつて、何も変わつてないから。

万里子 あんたもそう。いつまで仙台にいるの。帰つてくればいいのに。

唯史 仕事があるから無理だつて。ねえ、なんでそう、兄ちゃんと父さん会わせたがるわけ？

万里子 あんたもわかんない子だね。父さんだつて、会いたくないわけじゃないの。ただ、一度、勘当した手前、どうしていいかわからないだけで。

唯史 どうしていいかつて、勘当解くつて言えばいいんじゃないの？

万里子 それは無理。

喜久江 そうだね。あの子はいじつぱりだから。

万里子 みつともないとこ見せたくないつてのが父さんの意地だからね。

奈津子 でも相馬寿の新酒。

万里子 ううん、まだまだ。売りには出せないのよ。とりあえず作つてみたんだけど。

奈津子 じゃあ、来年？

喜久江 生きてるかねえ？

万里子 何言つてんの？ ぴんぴんしてるくせに。毎日、犬と一緒に散歩してるつていうでないの。

喜久江 散歩じゃない、ジョギングだ。

唯史 だつたら、今、急いでやることないんじゃないの？ こんな無理矢理、みんなで押しかけて。

万里子 無理矢理じゃないでしょ？ あんたは自分で来たんでしょ？

唯史 それはそうだけど……

万里子 じゃあ、父さん具合悪いということ。

亮二 母さん、父さんのせいにしないで、ちゃんと兄貴と話しなよ。帰つて来てほしいつて。兄貴が顔出そうかつて言ったの、来なくていいつて言ったの母さんなんだから。

万里子 だつて、それは父さんが……。わかつたわよ。ちゃんと話すから。

修一と尚人が戻って来る。

修一 あれ、まだいたの？

万里子 ええ、ちよつと話を。どうしたのあんた？

修一 ボランティア募集のビラ、持ってこうと思つて。

修一、ビラを探している。

万里子 修一。

修一 なに？

万里子 忙しいのボランティア？

修一 うん、まあね。

万里子 仕事はどうしてるの？ ちゃんと働いてるの？

修一 それなりに。

万里子 ああ、そう。

間

万里子 父さんがね、あんまり調子よくないんだわ。

修一 そうなんだ。

万里子 春からこつちずっと大変だったから。顔見せに来てやつてよ。

修一 うん、じゃあ、そのうち。

万里子 いやいや、そのうちでなくて、なるだけ早く。

修一 そんなに悪いの？

万里子 え？

修一 具合？

万里子 そうでもないんだけど、ほら、せつかく近くににいるのに、ちよつと顔出してくれれば安心するから。あんた長男なんだから。

修一 勘当されてるけどね。

万里子 いいじゃないの、ちよつと顔出すくらい。近くに來たんでとか、そんなんで。

修一 いいよ、そのうちで。

万里子 だから……（尚人に）あなたからも言ってもらえませんか？

尚人 ええ？

万里子 私、何もおかしなこと言っていないでしょ？

尚人 それはまあ。

万里子 ほんとに頑固なんだから。



間

尚人 僕も一緒に行つていいですか？

万里子 え？

尚人 僕も一緒に行つて、修ちゃんと暮らしてますって、挨拶させてもらえるなら。

万里子 あんた、何言つてんの？ そんなことできるわけないでしょ。

尚人 なんです？ 僕、何もおかしいこと行つてないですよ？

奈津子 たしかに。

亮二 おい！

尚人 大丈夫ですよ。一緒になんか行かないですから。でも、修ちゃん一人で行つても、同じなんじゃないですか？

万里子 だから、そのへんのこととはなかったことにして。

尚人 なかったことにはならないでしょ。ちゃんとそれをどうするか決めないと。ねえ、修ちゃん。

間

万里子 (尚人に) あなたご家族は？

尚人 修ちゃんが一人、あと宇宙つていう犬が一匹。

万里子 そうじゃなくて、親御さん。

尚人 親はいません。

万里子 いない。

尚人 両親は早くに離婚して、僕は母親に育てられました。その母も一昨年死んで、今は一人です。父は再婚をしたあと、また離婚して、今は一人にいるようです。連絡はとつてません。ただ年に一度、生活保護の確認の書類が届くだけで。扶養できないつて返事してますけど。

万里子 そう、それはお気の毒。

尚人 別に気の毒じゃないですよ。

万里子 修一、あんたどうなの？ さつきから黙ってるけど、あんただって父さん心配でしょ？ ねえ、良かったら、これから一緒に帰つて、父さんびつくりさせてみない？

唯史 でも芋煮が。

万里子 こういふのは勢いが大事だから、じゃ、そうと決まったらすぐに出発。栄ちゃん、お願い。

栄一郎 はい。

亮二 何も決まってるないだろ、母さん。

万里子 ちよつとだけだから、ちよつと。すぐなんだから。ね？

修一 わかった。

万里子 ほら、ごらん。よかったね。

修一 わかったから、もう帰ってくれるかな。

万里子 ええ？

修一 母さんも、なっちゃんも亮二も帰ってくれるかな、ばあちゃんも。

奈津子 でも、私……

修一 唯史に聞いたんだ。ばあちゃんの思いつきで、みんなで俺のところに行こうって話になったんだって。最初はばあちゃん、それから栄ちゃん、次がなっちゃんと亮二、最後が母さん。そうやって、勘当されても帰って来やすくなるようにって。でも、もういいから。

万里子 それは違うよ。あんた、私たちがどれだけつらい思いしたかわかってないでしょ？ばあちゃんもなっちゃんも、ほんとにあんたのこと頼って来てるんだよ。なんでそれがわからないの？

修一 わかってるよ。

万里子 わかってない。どんだけ被災地支援、熱心やってるか知らないけど、肝心の家族のことはどうなってるのよ。あんた、私たちの心配、どれだけしてくれた？

尚人 勘当されてるんだからしょうがないじゃないですか。そんな状態でも、ばあちゃんとなっちゃんの面倒、修ちゃん、ちゃんと見てましたよ。

万里子 あんたは黙ってて。修一、あんた、帰ってこれない理由があるんじゃないのかい？

修一 だから、勘当されてるから。もういいよ、この話は。もう出てってくれないかな。いいや、行かない。言うだけのことは言わせてもらう。あんた、私たちには、自分のことアレだと言ってたくせに、人には話してないっていうじゃないの？ 唯史から聞いたよ。

修一 ……

万里子 おかしくないかい？ だったら、うちに帰って来たって、わざわざそのこと持ち出さなくてもいいんじゃないかね。この人と一緒に来るなんてことしなくても、いや一緒に来たって、この人のことそんなふうに紹介しないでいたって。

修一 それとこれとは話が違うから。  
万里子 いや、同じだって。あんた、なんでそんななの？ 何の後ろめたいこともないなら、胸張って帰ってくればいいじゃないの。父さんにだって、おれはちゃんとやってるんだって。今、大変なら、おれがいくらでも助けてやるって。父さんだつて、それ待ってるかもしれないでしょ。

修一 そんなことない。

万里子 だったら、会って直接聞いてみなさいよ。できないくせに。

修一 ……

万里子 あんなに大見得切った映画の仕事してないんだって、別にかまわない。こんんふうに、仕事だか、遊びだかわからないような暮らしていたってかまわない。あんたが今、胸張って毎日暮らしてるんだったら、だったら、帰ってきなさいよ。

間

修一 話はおしまい。

万里子 ……うん。

修一 じゃあ、帰ってよ、みんな。母さんにそんなこと言われなくたってわかってるから、ちゃんと。震災で大変だったのはよくわかる。でも震災のせいで、急に家族の絆なんてもの思い出して、僕のこと思い出して、そうだ久しぶりに会ってみようかなんて思いついただけでしょ。だって、十年間ずっと何もなかったんだから。僕はいないことになってたんだから。僕もいないことになってたけど。震災のおかげでばらばらになってた家族が一つになった。なんて感動的な話、期待してるのかも知れないけど、そうじゃないから。バラバラになるにはなるだけの理由があったわけだから。それをなかつたことにして、また新しく始めるなんてできないから。

喜久江 修一……。

修一 ばあちゃんもなつちゃんも、もういいでしょ。楽しかった。元気で。

喜久江 私はいさせてもらうから。

奈津子 私もここで産ませてもらいますから。

修一 もう帰ってくれよ！ 言っておくけど、僕は父さんが認めてくれないかぎり、絶対に帰らないから。それで全然かまわない。だから、もう行って。栄ちゃん、亮二、頼むよ。

亮二 わかった。（奈津子に）行くよ。支度しよう。

奈津子 なんて？

亮二 なんでも。

亮二、奈津子を連れて退場。

栄一郎 大奥様。

喜久江（修一に）あんたの勘当が解ければいいんだね。

修一 無理でしょ。僕は何も変わってないんだから。

喜久江 わかった。とりあえず行くよ。じゃあね。

栄一郎、喜久江、退場。

修一 母さんも。

万里子 わかった。

万里子、出て行く。

唯史 兄ちゃん。  
修一 さあ、行こう。みんな待ってる。

修一、ビラを手に取り、出かけようとする。

\* \* \* \* \*

### 六、どんど焼き

1月の中旬。

夜、修一と尚人 幸枝がやってくる。

幸枝 おぼんです。しばれるねえ。はあ、雪かき、さつきはありがとうございました。  
尚人 いえいえ。  
幸枝 浩行、バイトバイトって、何にもしてくれなくて。これ、つまらないものですけど、お礼。

包みをテーブルの上に。

幸枝 どんど焼き。  
尚人 どんど焼き？  
幸枝 駄菓子みたいなもんだけどね。小麦粉薄く焼いて、うすーく切ったソーセイジ乗つけてあるの、ソースたっぷりつけて、割り箸にぐるぐるまきにして。  
尚人 お好み焼き？  
幸枝 そんな立派なものじゃないんだけど。どうぞ。  
修一 ありがとうございます。

手を伸ばすが、引っ込める。

修一 後にします。ちよつと食欲なくて。  
幸枝 どうしたの？ お正月の疲れ？ 旧正月の頃って、年越しの疲れがどーんと来るのよね。宮坂さん、年末年始、被災地行きっぱなしだったから。  
尚人 そうじゃないんです。なっちゃん、今日が予定日なんで。  
幸枝 産まれたの、おめでとう！  
修一 いや、まだなんです。  
尚人 亮二くんから、入院したって電話もらってから、ずっとこんなで。

たしかに修一は、うろろると落ち着かない。

幸枝 まあ、落ち着きなさいよ。ここでおろおろしたって、始まらないんだから。  
尚人 おれもそう言ってるんですけど。

携帯が鳴る。

修一 お！（携帯を見るが）なんだよ！

幸枝 何？

修一 スпамメール。

幸枝 ああ。

尚人 落ち着きなって。

修一、ようやく座る。

がすぐ立ち上がってうろろしはじめる。

幸枝 ご実家のみなさんは？ 病院に？

修一 亮二と母と、ばあちゃんと、向こうの親御さんと。

幸枝 ちゃんと産まれるかねえ？

修一 へ？

幸枝 だって、初めてでしょ？

修一 ああ、そうですね。

幸枝 あ、そうか、心配することあるものね。でも、検査は何ともなかったんでしょ？

修一 まあ、そうなんですけど。こればかりは産まれてみないと。

幸枝 大丈夫よ。じゃなかったら、わぎわぎこっちに來てた意味がないじゃない。だい  
じょぶだいじょぶ。

修一 だといんですけど。

尚人 そんなに心配なら、病院行けばいいんじゃない。心配してもしようがないでしょ。  
幸枝 落ち着いておしゃべりしましょう。どんど焼き食べて。あつたかいうちに。

三人、座って、どんど焼きを広げる。

尚人 うまそう。いただきます。

食べる三人。

幸枝 ねえ、あんたたちは結婚しないの？

修一・尚人へ？

むせる二人。

幸枝 オバマさんが認めたっていうじゃないの、同性婚。男同士、女同士結婚してもいいって。浩行が言ってたけど、アメリカだけじゃなくて、ヨーロッパにもそういうところいっぱいあるんだってね。

修一 ああ、そうですね。

尚人 でも、日本じゃできないんです。今のところ。

幸枝 なんです。

尚人 憲法の規定で、結婚は両性の合意のもとしてあるんで。両性ですから。男と女ってことなんで。

幸枝 じゃあ、憲法変えなくてはだめなのね。

尚人 まあ、そういうことです。

幸枝 そうなの、やっぱり大変なのね。

修一 別に、結婚にはこだわってないんで。

幸枝 そうなの。

修一 まあ、うれしいニュースでしたけどね。

尚人 とりあえず結婚しちゃったら、なかなか別れづらくていいかななんて。

幸枝 やだ、そんなこと。

栄一郎 ごめんください。

栄一郎がやってくる。

尚人 どうしたの？ こんな遅くに。

栄一郎 病院行きませんか？

修一 いいのに、わざわざ。

尚人 ありがとうね。さっきから言ってるんだけど、いかないって。

栄一郎 なんです？

尚人 顔会わすのがいやだって。お父さん。

栄一郎 こういう時なんだから、会っちゃえばいいのと思うんですけどね。

尚人 頑固だから。

栄一郎 社長、寒仕込みの最中でそれどころじゃないんで。大丈夫ですよ。行きましょう。

修一 そう、そうかな？ いや、いや。連絡を待つ。落ち着け自分。

尚人 まあ、行っても落ち着かないのにかわりないんだらうけどね。

栄一郎 その気になったら、言っておきなさい。すぐ乗せていきますから。

修一の携帯が鳴る。

修一 お、亮二だ。どうした？ 産まれた？ おい、泣いてんの？ おい、まさか。亮

二、しつかりしろよ！ ……そう。女の子。よかった。無事で。うん。うん、な  
つちゃんも。うん、うん。よかったよかったよ。

修一、涙ぐんでいる。

修一 え、ばあちゃんが？ ばあちゃんがどうして？ わかった。わかった、すぐ行く。

電話を切る。

幸枝 どうしたの。

修一 女の子が無事に産まれたって。

幸枝 それで？

修一 見舞いに来てたばあちゃんが倒れたって。意識がないらしい。

幸枝 ええ？

栄一郎 行きましょう。

修一 うん。

一同、あたふたと出て行く。

\* \* \* \* \*

### 七、柱時計

場面は変わって、喜久江が入院している病院の一室。

ベッドに起き上がっている喜久江。

そして、三人の孫。修一、亮二、唯史。

喜久江 なんだい。三人揃って。

唯史 呼ばれたから来たんだよ？

修一 元気そうじゃない。連絡もなかったときはびっくりしたよ。

亮二 でも、寝てた方がいいんじゃないの？ 本調子じゃないんだから。

喜久江 もう1週間もいるんだよ。そろそろ退院できるんじゃないのかい？

亮二 もうすこし、落ち着いたらって。

修一 だから、寝てた方がいいよ。

喜久江 毎日、みんなが見舞いに来て、まるで死んでしまうみたいだよ。

亮二 何言ってるの？ 自分で呼んでおいて。

唯史 そうだよ、兄弟三人で来いつて何？

間

喜久江 赤ちゃん、元気かい？ なっちゃんも。

亮二 うん。元気。

喜久江 名前はつけたの？

亮二 うん。

喜久江 なんて？

亮二 「そら」。

喜久江 ああ、良い名前だ。

亮二 「宇宙」って書いて「そら」って読むんだ。

唯史 キラキラ系だよな。

喜久江 修一のところの犬と同じ？

亮二 あれはそのまんま「うちゅう」だから。奈津子がそうしたいって。だから、兄貴は間接的に名付け親なんだよね。

修一 そんなことないって。

喜久江 うん、良い名前だ。

間

亮二 ばあちゃん？

喜久江 おまえたちには話しておこうと思つてね。父さんのことだよ。お前達の。

修一 父さん？

喜久江 そう。(修一に)会つたかい？

修一 うん。会つたよ。この間見舞いきたとき、ばあちゃんまだ意識なかったけど。

喜久江 あんたんとこにいたときは、どんなに顔出せつて言つてもこなかったのに。どうしてた？

修一 別にないも。おおつて。あんまり俺の方みないで。

喜久江 そうかい、じゃあ、会つたんだ。入院してみた甲斐はあつたね。

修一 何言つてんだよ。

喜久江 仲直りできそうかい？

修一 わかんない。それしか話してないから。

唯史 ていうか、話してないよね、それ。

亮二 まあ、ぼちぼちやつてけばいいさ。

喜久江 父さんには秘密があるんだよ。父さんはね、宮坂の血は受け継いでないんだよ。

修一・亮二・唯史 へ？

喜久江 父さんの本当の父さんつていう人はね、戦争に行つて死んでしまつて。私は、お



腹の子供抱えてどうしようかと困ってた。そうしたら、あんたたちのじいちゃんが、俺のところ来いって。言ってくれたのよ。宮坂の家に嫁に来いって。あの頃、戦争で兄が死んだら弟の嫁になるのが当たり前だったりもして。父さんの父さんと、あんたたちのじいちゃんは仲が良くってね。親友や兄弟以上だったんだよ。お腹の子は俺の子だ。あいつと喜久江さんの子だったら、本当の俺の子以上に俺の子だって。だから、みんなには内緒にしようって。

修一 それって、柱時計の人？

唯史 平井堅？

喜久江 そうそう。いい男だったねえ。今でも思い出すよ。三人でしょっちゅう遊びに行った。春は花見、夏は海、秋は紅葉を見に山にのぼって。なつかしいね。みんな若かった。

修一 父さん知ってるの？

喜久江 ああ。血液型が違ったんだね。どうしてなんだって問い詰められて。言ってしまった。

修一 そうなんだ。

喜久江 でも、あの子は宮坂の家を継いで、代々受け継いできた酒を守ってきた。修一の話聞いたとき、あんなにおこったのも、それだけ期待して楽しみにしてたからなんだよ。でも、それはそれ。父さんだって、わかってるんだ。血のつながりなんて、大したもんじゃないって。もつともつと深いものがあるんだってこと。だから、あんたたちもそのつもりで生きていっておくれ。

三人 うん。

喜久江 そらは女の子だ。もう一人男を産めつてみんなに言われるかもしれない。でも、そんなの気にすることない。女が継いで何が悪い。いや、継がなきゃいけないことだつてないんだ。代々続いた酒が、今年も来年も同じ味でできあがってくれば、作り手が誰だって、そんなこと関係ない。そうなんだよ。さて、これで話はおしまい。もう、いいからかえりな、もう大丈夫だから。

修一 なんだよ、その言い方。

喜久江 話してすつきりしたよ。じゃあね。

修一 じゃあ。

柱時計の音。

祖母去っていく。

\* \* \* \* \*

八、花見

2012年4月。

浜辺。波の音。

修一と健吾。

健吾　　そうですね。おばあちゃん亡くなったんですか。  
修一　　うん。元気になったら、またこっちにおいでって言ってただけだね。一緒に花見しようって。

間

健吾　　ありがとうございます。うれしかったです。  
修一　　え？

健吾　　修一さんが、ゲイだよって言うてくれたんで、いやすくなりました。  
修一　　別にたいしたことじゃないでしょ。セクシャルマイノリティの支援してますって言うくらいだから、ちゃんと話したって別にいいかなって。もつとびつくりされるかと思ったら、それでもないってことは、ばれてたってことかな？  
健吾　　そうじゃなくて、それだけ、頼りにされてるってことだと思いますよ。  
修一　　そうかな？  
健吾　　何にも変わらないってそういうことじゃないですか？  
修一　　だったら、いいんだけど。

尚人がやってくる。

尚人　　何してんの、行くよ。みんな待ってる。  
修一　　うん。  
健吾　　はい。  
尚人　　(健吾に) 唯史くんが心配してたよ。どこ行ったんだって。  
健吾　　ちゃんと行ったのに。宇宙の散歩だって。  
尚人　　俺は別に心配してないけどね。信じてるから。  
修一　　やめてよ。

尚人の携帯が鳴る。

尚人、出る。

尚人　　おお、ヒロくん。はーい。……だから、カズくんに言うてよ。場所取りしたのカズくんなんだから。斉木さんはね、いい。無視して。とりあえず文句言いたい人だから、聞くだけ聞いてスルーして。じゃ、これから行くから。どのくらい集まった？　おお、いいね。じゃ！

修一 どのくらい来たって？

尚人 今、20人くらいだつて。よく集まったよ。やっぱり花見だからかな。

修一 去年、自粛ムードでできなかったからかも。

尚人 自粛なんてすることなかったよね。死んだ人だつて喜ばないと思うよ。みんなで思い出しながら、飲んでさわいだほうがよっぽどいい供養になる。(健吾に) あ、ごめん。

健吾 いいです。ほんとにそうだと思うんで。

修一 そうかな？

健吾 そうですよ。絶対に。

尚人 亮ちゃんたちもそろそろ着くつて、さっきメールあった。いいよね、赤んぼうもいるゲイの花見つて

健吾 なんでもありません。

尚人 うん。

幸枝の声 宮坂さん！

幸枝が登場。息が荒い。

幸枝 ああ、宮坂さん！ お父さん、見えましたよ。

修一 ええ、父さんが？ なんて？

幸枝 亮二さんとなつちゃんから聞いたつておっしゃってましたよ。まだ来てませんかつて？

修一 なんて話すかな？

幸枝 みなさんが出かけた後、片付けてさあ行こうと思つたら、ごめんくださいつて。

尚人 何しに来たんだろ？

幸枝 私が大家ですつて挨拶したら、息子がお世話になってますつて。

修一 息子つて。

幸枝 ええ。きちんとした方ですね。もつと頑固なオヤジさんかと思つてたら、物腰のやわらかい。ていねいな方。いろいろ聞いてるんで、とりあえず待つてもらつてます。今、宮坂さんが作ったオブジェ、一つずつ見てらっしゃいますけど。どうします？

修一 ……

幸枝 ああ、そうそう。お酒いただきました。一升瓶、二本。新酒ですつて。

尚人 修ちゃん？

健吾 宮坂さん？

問

修一 息子か……

間

修一 よし、じゃ飲んでやる！ 花見にも連れてってやる。みんな紹介してやる。どんな顔するか。

尚人 うん。俺も会ってみたい。

修一 じゃあ、宇宙、散歩は終わり、行くぞ！

犬の吠える声。

尚人と健吾、幸枝、退場。

修一も歩き出すが、ふと立ち止まり、海の方を見ている。

尚人 (遠くから呼ぶ声) 修ちゃん！

修一 今行く！

大きく息を吸って、歩き出す。

誰もいない海。

波の音。

うららかな春の陽射し。

幕

劇団フライングステージ第37回公演「ワンダフル・ワールド」

日程 2012年7月4日(水)～8日(日)

会場 下北沢 駅前劇場

作・演出 関根信一

出演

宮坂修一	⋮	大地泰仁
宮坂亮二	⋮	遠藤祐生
宮坂唯史	⋮	小林高朗
宮坂奈津子	⋮	木村佐都美
宮坂万里子	⋮	石関 準
宮坂喜久江	⋮	藤あゆみ
内藤栄一郎	⋮	阪上善樹
渡部尚人	⋮	岸本啓孝
斉木 守	⋮	水月アキラ
錦織和寛	⋮	吉田日曜
水野幸枝	⋮	関根信一
水野浩行	⋮	坂本穂光
神田健吾	⋮	羽矢瀬智之

照明 伊藤 馨

照明操作 横佩 彩

音響 樋口 亜弓

舞台監督 金安 凌平

フライヤーイラスト ぢるぢる

フライヤーデザイン 石原 燃

制作 渡辺智也、三枝 黎

協力 おちないリンゴ

z a c c o

M・M・P

CoRich 舞台芸術!

芸術文化振興基金

企画制作 劇団フライングステージ

主催 劇団フライングステージ